

## ガージャール朝期旅行記史料研究序説

守川 知子

### はじめに

ガージャール朝（1210-1344/1796-1925）時代の主要史料として、年代記や文書史料と並び、「一人称の記録」[Ashraf 1375s-b] と呼ばれるところの一連の史料群がある。この「一人称の記録」とは、回想録 (khāṭirāt) や日記 (rūznāma), 旅行記 (safarnāma) など、著者が日常の自身の体験を一人称で記した叙述史料のことである。これまで、これらはすべて「回想録」と一括して認識され、基本的な研究はこの認識に基づいて提示されてきた<sup>1)</sup>。しかしながら、この中の旅行記とは、言うまでもなく「旅の記録」であり、旅という非日常の特別な空間・時間の出来事を記すものであるがゆえに、回想録や日記とは一線を画すと見なし得よう。もっとも、旅行記の中には、著者が自らの出自や来歴、時には自身の思想や過去の逸話など、旅行とは直接関係のないことについて触れている場合もある。逆に、「回想録」と銘打った書物の中にも、著者が生涯のうちに行った旅行について述べることや、さらには旅の記録も日常の記録も区別することなく、日記と称して記録している場合もある。このように旅行記は、回想録や日記と分かちがたい存在であることも事実であるが、ガージャール朝時代には、本稿で見ると、「旅行記 safarnāma」と題したペルシア語文献が豊富に存在し、その数から見ても一つの独立した文献史料群として認識することが可能である<sup>2)</sup>。

一方、旅行記文献一般に関するイラン国内外の研究としては、イラン人による旅行記よりもむしろ、16-17世紀以降オリエント世界に目を向けた西欧人ら外国人の書いたイラン旅行記にのみ注意が向けられており、ペルシア語への盛んな翻訳活動とともに、「外国人の見たイラン（あるいはイラン人）」というテーマでの研究がより積極的に行われている<sup>3)</sup>。こ

---

1) IN 14 (4) および同 15 (1) は、「イランの回想録特集」に充てられており、回想録の史料上の位置づけや、女性・トゥーデ党・ユダヤ教徒・アゼリーなど少数派の回想録、ガージャール朝期の回想録から見た宮廷とその人間関係に関する研究、および出版目録が掲載されている。この他、Fragner が 18-19 世紀のペルシア語での回想録を包括的に検討しており、回想録の一形態として、数点の旅行記についても紹介を行っている [Fragner 1979: 13-49]。

2) 本稿では、書名や内容を参考に、旅行に際して書かれた旅の記録を「旅行記」と見なす。

3) 西洋人らを中心とした外国人によるイラン旅行記を扱った研究としては、ガージャール朝期の旅行記 100 点を用いて、当時のイランの政治・風俗・文化を包括的にまとめた Inšāfpūr 1363s が

のような外国人による旅行記は、啓蒙主義時代の西洋人特有の精緻な観察に基づく信頼に足る史料であるとはいえ、オリエンタリズム的な物珍しさの助長を含め、イランの気候・風土・慣習やイラン人の気質といったイラン紹介に関心が限定されているきらいがある。しかしながらガージャール朝時代には、先述のように、非常に多くのイラン人により、イラン国内外への旅行記が執筆されており、これらからは、イラン人の旅の様子のみならず、イラン人自身がどのように諸外国や諸地方を見、また彼ら自身がどのように当時のイランを認識していたかといった、彼らの関心や問題意識をも探ることが可能である。さらに近年、ガージャール朝時代のペルシア語文献史料の校訂・出版がイランでは活発に行われており、今後の近代イラン史研究にとっての根本史料として利用し得る便宜が図られつつある。

本稿では、このような近年のイランにおける出版状況や研究動向を踏まえた上で、現段階で確認し得るイラン人自身の手になるペルシア語旅行記を紹介し、その全体像を提示するとともに、これまでに欠けていた以上のごとき点をも明らかにしてくれる有益な史料として、その史料的価値の考察を試みる。

## I 旅行記文学

イスラム世界では、Našir-i Khusraw (5/11世紀)やIbn Jubayr (d.614/1217)などにより伝統的に旅行記が執筆されており、ガージャール朝に先立つサファヴィー朝期(907-1148/1501-1736)にも、*Khiṭāy-nāma*や*Safina-yi Sulaymāni*など、数点の注目すべき旅行記が書かれている<sup>4)</sup>。しかし、このように興味深い旅行記が書かれていた一方で、イラン人自身はさほど旅行や旅行記に関心を持たなかったようである。17世紀後半に長年イランに滞在したフランス商人シャルダンは、「ペルシア人は散歩も旅行も好きではない。散歩に関しては、これはわれわれヨーロッパの風習のうちで彼らがばかげたものとする一つで、遊歩道のそぞろ歩きなど気の狂った人の行為とみなしている」と述べた上で、当時のイラン

↙ある。また、対象とする時代は遡るが、外国人の目から見た当時のイランの社会や風俗を中心に紹介・検討したJawādī 1378sやQarīb 1377sの研究が挙げられる。地方研究の分野では、サファヴィー朝からガージャール朝時代までのマシュハドの変遷やレザー廟について考察したṬāhir-niyā 1376s、ホラーサーンの歴史、特にガージャール朝期の政治的混乱を考察したṬāhiri 1348s、古今東西の58人の旅行者によるエスファハーンに関する記述をそれぞれの著者ごとに紹介したIshrāqī 1378s、33点の旅行記を用いて19-20世紀のロレスタンを扱ったĀriyā 1376sなどが挙げられる。

4) Ṭabāṭabā'i 1377sは、17-18世紀に書かれたこれら2冊を含む数点の「使節旅行記」を扱い、当時のイラン人使節は、西欧の使節とは異なり、目新しいことにばかりに目を向けた物見遊山的な記述を多く行い、諸外国と比較した上でイランの立ち後れや問題点を指摘するにもかかわらず、国家システムの構造やその背景をより深く考察するといった視点に欠けているという興味深い見解を提示している。

人の旅行への関心について、次のように記している。

旅行に関していえば、たんに好奇心のためにする旅行は、散歩以上にペルシア人には想像しがたい。自国のものとは違う風習を見たり、聞いたこともない言語を耳にしてわれわれが身におぼえる快楽を彼らはまったく知らない。(略)

この国の人びとは(略)、自宅で休息している時にもっともよく徳をつみ、生の愉悅を味わうことができると考える。つまり、財貨を得る目的のほかは、良い旅ではないのである。(略)

ペルシア人が世界の他の国々の現状にはなほ無知で、地理をまったく理解せず、地図をもっていないということは、もちろん以上の気質に関係づけて考えるべきであろう。なぜなら、他の国々を見たいと思う好奇心がほとんどなく、従って他国にいたる道や距離に関心がないことから、こうした無知無理解があらわれてくるのだから。彼らのあいだには諸外国見聞録も新聞雑誌も、手書きのニュースも情報取扱所もない。[シャルダン：136-139]

このシャルダンの言によると、利益のない旅行を疎み、他国のことに無関心と認識されていたイラン人であるが、1-2世紀を経たガージャール朝時代になると、状況は大きく変化する。

イラン国内外の各図書館の写本目録や文献リストなどを基に、ペルシア語文献を収集・紹介した Munzawī の *Fihristwāra* には、およそ400点の旅行記が掲載されている[Munzawī 1374s: 61-158]。この最も網羅され包括的に集められた文献目録に基づき、この中から「ガージャール朝時代のイラン人自身の手によって書かれたもの」に限定して抽出し、さらに現段階までに公刊されたものや、他の諸目録に挙げられているものを加え、かつ重複や Munzawī の誤りを訂正した上で作成したものが稿末の3つの一覧表である。これによると、「ガージャール朝時代のイラン人による旅行記」は、およそ283点存在することが確認される<sup>5)</sup>。

この一覧表に基づき、執筆年代の確認し得るものについてのみ、シャーの治世ごとに区分けして見てみると、Fath 'Alī Shāh (在位 1212-1250/1797-1834)：25点、Muḥammad Shāh (在位 1250-1264/1834-1848)：15点、Nāṣir al-Dīn Shāh (在位 1264-1313/1848-1896)：162点、Muẓaffar al-Dīn Shāh (在位 1313-1324/1896-1907)：33点、Muḥammad 'Alī Shāh (在位 1324-1327/1907-1909)：4点、Aḥmad Shāh (在位 1327-

5) Munzawī の情報が曖昧な場合も多く、筆者自身が確認し得なかったものもあるが、現段階においてはこの *Fihristwāra* が最良のペルシア語文献目録であり、これを中心に扱うことに大きな問題はないと考える。また、この時代はインドでもペルシア語で多数の旅行記が執筆されており、Abū Ṭālib Isfahānī の *Masir-i Ṭālibī* など、ペルシア語旅行記文学の先駆的かつ重要な作品も存在するが、これらに関してはテーマの関係上すべて省略した。

1344/1909-1925)：18点となる〔次頁表参照〕。この中で、Nāṣir al-Dīn Shāh の治世は48年と他と比べても圧倒的に長く、単純な比較はできないことを考慮に入れても、全体の半数以上におよぶ旅行記が彼の治世中に執筆されていることは注目に値し、旅行記執筆の文化が彼の時代を一つの頂点としていたであろうことが窺われる。

Nāṣir al-Dīn Shāh 時代に旅行記が多く執筆されるようになった理由の一つは、このシャー自身にあると考えられる。非常な旅行好きで知られている彼はその治世中に何度も数ヶ月にわたる旅行に出かけているが、1286/1870年早春にはギーラーンへ巡遊し、このとき初めて自身で旅行記を執筆〔I-19〕して以降、数度にわたって自らが筆をとって旅行記を書くようになった<sup>6)</sup>。これら一連の彼の旅行記は、旅中の風景や出来事のみならず、同行した関係者の様子や歴史的遺跡等についても詳細に述べるなど、彼の好奇心の旺盛さを表しているが、その簡潔な文体は、後のペルシア語旅行記文学全般にわたる一つの規範ともなっている。その証左の一つとして、Nāṣir al-Dīn Shāh の側近であった I'timād al-Saltāna は、当時のイランでの旅行記文学の隆盛について、MA 第8章「この時代<sup>7)</sup>に、イランにて発展した工業や学問、変化のあった風俗・習慣など」の中で、「旅行記文学の普及」と称して次のように述べている。

この賞賛されるべき行いを国王陛下自らが普及された。この新たな時代においては、イランの民の優れた者のうち、旅行者でありながら益ある旅について記さない者はごくわずかしかおらず、皆、この崇高な行為において、陛下の追随を行い、模倣に励んでいる。〔MA：127〕

ここで述べられているように、ガージャール朝期の旅行記文学は、Nāṣir al-Dīn Shāh を先導者としてそれに追随する形で宮廷内を中心に発展したと考えられ、それを裏付けるように、執筆者の多くは、シャーや王子をはじめとした政府内の高位高官かあるいは役人など、宮廷関係者たち (darbāriyān) であり、民間人による旅行記は極めて少ないことも特徴のひとつである<sup>8)</sup>。また、今回抽出し得た旅行記の中では、女性の執筆者はわずか二人〔I-66,

6) 主だった旅行を挙げると、1. ホラーサーン (1283/1866, III-18), 2. アタバート (1287/1870, III-36), 3. ヨーロッパ (1290/1873, I-18), 4. マーザンダラーン (1292/1875, I-21), 5. ヨーロッパ (1295/1878, I-17), 6. ホラーサーン (1300/1883, III-29), 7. ヨーロッパ (1306-07/1889, I-74), 8. エラーケ=アジャム (1309-10/1892, I-68) があり、第一回目のホラーサーンとマーザンダラーンを除き、その他すべてについて、彼自身の筆による旅行記が存在する。これらの旅行の他にも、彼は毎年狩猟や巡遊に出かけており、このうち1305/1888年までの旅行については、MA：132-135参照のこと。

7) MA は、1306-07/1890年にNāṣir al-Dīn Shāh の即位40年を記念して執筆・出版された。

8) 宮廷関係者が執筆者の多数を占めることは回想録の場合も同様であるが〔Fragner 1979：5〕、一方でAshrafは、回想録の場合は短期間ながらも立憲革命期(1900-1920)にその数が多いことを指摘しており、このことは、政府関係者や改革指導者・推進者が回想録の執筆者全体の四分の三を占めるといふ事実とともに、旅行記とは異なる史料上の性格を表していよう〔Ashraf 1375s-a：432〕。

III-56] であり、女性が単独で旅行することが認められていなかった当時の社会的な制約をも反映していると思われ得る。

旅の行き先別に見ると、国内 133 点、国外 150 点となり、国外の大勢はヨーロッパやインド、あるいはメッカなどへの巡礼の旅であるが、このような旅行記の種類や内容については次章で詳しく検討する。

また、この時代の旅行記は、旅の出発から目的地（あるいは帰国）まで、日記風に日々の状況を綴ったものが多く、出発と到着の時刻、移動距離、地理的状况、旅の手段・方法、食事や休息、物価や鉄道・船などの運賃、諸経費、宿の状況、土地の為政者・有力者の様子、遺跡・建物や地域の産物などについて、技巧に走らない平易な文体で記されている。加えて、先述のように、執筆者が宮廷関係者であることが多いため、イラン国内の地方のみならずヨーロッパなど他国においても、土地在住の有力者による出迎えや面会の様子、接待や饗応の宴などが特に重視して書かれており、宮廷内外の有力者たちの人間関係を伝える非常に有益な史料ともなっている点は看過すべきではない。

治世および種類ごとに見た旅行記の数

	FA	Mh	N	Mz	MhA	A	不明	計 (国内)
周遊	12	5	49	16	2	7	13	104 (58)
官命	10	5	73	2	0	1	7	98 (57)
巡礼	3	5	40	15	2	10	6	81 (18)
計	25	15	162	33	4	18	26	283 (133)

## II 旅行記の種類

それでは実際に、如何なる種類の旅行記があるのかその内容について検討する。283 点の旅行記は、どのような動機や目的でもって旅に出たか、という旅行の目的に応じて分類すると、以下の 3 つのジャンルに分けることが可能である。

1. 周遊旅行記 (safarnāma-yi jahāngardi) —— 周遊や見聞などレクリエーション的な旅の際に書かれた旅行記。
2. 官命旅行記 (safarnāma-yi ma'mūriyatī) —— シャーや政府高官により任命された官僚によって書かれた報告書の類の旅行記。
3. 巡礼旅行記 (safarnāma-yi ziyāratī) —— メッカ・メディナへの巡礼およびアタバートやマシュハドなどのイマーム廟への参詣の際に書かれた旅行記。

この分類からも明らかなように、ガージャール朝時代の旅行記と一口に言っても、その旅行の目的は様々であることが窺われる。すなわち、旅行というのは、一つにはその本来の意味でもある、周遊を目的としたレクリエーション的あるいは物見遊山的な旅行が一般的と考えられようが、しかし、ムスリムである彼らの場合には、Nāṣir-i Khusraw をはじめ伝統

的にメッカ巡礼を主たる目的とした旅行がむしろ重視されており、従って巡礼に際して書かれた旅行記も多数存在する。さらに、ここで「官命旅行記」と銘打った旅行記は、この時代に特有の旅行記であり、後述の如く、この種の旅行記がガーニャール朝の旅行記文学の最たる特徴であるとも考えられるほどである。以下、稿末の表を参照しつつ、それぞれのジャンルについて個別に検討する。

### 1 周遊旅行記 (safarnāma-yi jahāngardi)

「周遊旅行記」とは、見聞のためあるいは何らかの事情で旅に出たときの旅行記と定義づけられ、いわゆる紀行文や見聞録といったものに相当する。ここでは104点の旅行記が数えられるが、周遊や物見遊山以外にも、避暑や狩猟に出かけるなど遊興の色合いが濃いシャーや王子の旅行 [I-5, 22, 23, 50, 77, 87 など] や、病氣療養のための旅行 [I-70, 86] あるいは政治的理由による亡命 [I-14] もまたこの中に含まれている。

行き先はイラン国内が58点と半数以上を占める。一方で外国の場合は、インド、エジプト、トルコ、ヨーロッパ、アメリカ、中央アジア、中国、日本、東南アジアと非常に広範囲にわたっている<sup>9)</sup>。このような諸外国への旅行の中で、当時最も重要であったと考えられるのは、シャーによって代表されるヨーロッパ旅行である。Nāṣir al-Dīn Shāh はイランの国王としては初めて、1290/1873年にロシアを皮切りにドイツ・ベルギー・イギリス・フランス・スイス・イタリア・オーストリア・トルコを5ヶ月かけて歴訪し、その後も1295/1878年、1306-07/1889年と計3度ヨーロッパに外遊している。このようなシャーの外遊は、イランの軍勢力や国力増強のための視察といった側面があったことも事実であるが、その一方で旅の成果は非常に乏しく、かつ旅費を外国資本からの借款によって補っていたために、度重なる外遊は国家財政を逼迫させる主因の一つであると当時でさえも考えられていた。にもかかわらず、続く Muẓaffar al-Dīn Shāh も、わずか10年あまりの治世の間に、1317-18/1900年、1320/1902年、1323/1905年の3度にわたって訪欧している [I-71, 72, 73]<sup>10)</sup>。この二人のシャーに倣うかのように、ヨーロッパ旅行記を書き残した者は多く(12点)、このことから、ヨーロッパが当時のイラン人にとって重要な意味を持ち、彼らがそこに多大な関心を寄せていたことが窺われよう。それと同時に、西洋近代文明と接触した知識人や有力者らエリートが、自身の見聞録によって、イラン本国にヨーロッパ文化の紹介と普及を意

9) 中央アフリカや南米に行った例は確認されないが、これらの地に関しては、西洋人らの旅行記の翻訳が Nāṣir al-Dīn Shāh 期に I'timād al-Saltāna 管轄の Dār al-Tarjuma (翻訳所) にて数多く為されている [Munzawī, ibid]。

10) Muẓaffar al-Dīn Shāh の訪欧と国家財政の逼迫、およびシャー自身のお粗末な内容の訪欧記については、Tāj al-Saltāna が辛辣な筆致で述べている [タージ: 304-309, 317]。また、このシャーの旅行記を扱った研究として Wickens 1983 がある。

図した啓蒙の側面があることも看過してはならない点である。

また、周遊旅行記の中には、一箇所のみを目的として出かけるのではなく、中近東一帯や、ヨーロッパからアメリカ、日本、中国、インドと世界一周の旅を行っている者も少なからずいることは注目に値する [I-4, 40, 46, 51, 59, 96]。彼らの場合、数ヶ月や時には数年にもわたる長旅を維持する費用をどのように調達したのかについてはあまり触れられていないが、他の旅行記に見られるように、事前に借金をする場合 [II-41] もあれば、イランからの送金を受け取る場合 [III-64] もあったようである。この中で、例えば9ヶ月かけて世界を一周したŞaḥḥāf-bāshī は、持参の宝石を売りさばくことで旅費を工面していたようで、そのためか運賃や諸国の物価・俸給に至るまでを、「これまでの旅行記では十分に述べられていない」 [I-41: 21] として詳細に述べており、彼の旅行記の特徴は、諸国の物価に尽きると言っても過言ではないほどである。

このような周遊旅行記は、時に個人的な事柄や日常生活の記述に終始しており、内容が不十分に感じられることもある。しかし、大半の著者は、彼らにとって目新しいものやあるいは祖国や故郷とは全く異なる世界の状況をその著作の中で伝えようと努めている。他方、たとえ物見遊山的な内容であっても、世界の各地へ旅し、その記録を書き残すということは、当時のイランにおいて異国や異文化への関心が高まり、読み手と書き手の双方にとって旅行記の需要があったことを示唆しており、国内の旅行に関して残された多数の旅行記とともに、如何なる形であれ、旅行記の執筆が当時の流行であったことを裏付けるものである。すなわち、この時代の周遊旅行記は、他の国や地域に対する好奇心を持ち合わせたイラン人が、どのように異文化と接し、またどのような点に関心を持ったのかということを知る手がかりとして、またとない情報を提供してくれるのである。

## 2 官命旅行記 (safarnāma-yi ma'mūriyatī)

ガージャール朝時代の旅行記の中で、これまで十分な検討が為されてこなかったが最も重要な位置を占めると考えられるのが、「官命旅行記」である。官命旅行記とは、シャーや地方長官らによって任じられた役人が、当該地方に赴き、その任務の内容を君主らに報告する、一種の報告書と定義することができよう。すなわち彼らの旅行の目的は任務遂行であり、旅行記執筆は実地見聞に基づく報告書の提出という側面をもつ。この点において、これらの旅行記は他の旅行記とは大きく性格を異にする。

98点を数える官命旅行記には大きく分けて、1) 国外に使節 (ilchī, safir, wazīr-i mukhtār) として派遣される場合、2) 特にイラン国内で、実地調査を含め各地の情報収集や視察のために派遣される場合、3) 書記 (munshī) としてシャーや長官の旅行を記録するために随行する場合<sup>11)</sup>の三種がある。

11) 本稿では、書記によって代筆された旅行記は、執筆依頼者の旅行の目的に応じて分類されている [I-14, 21, 22, 50, 56, 77, 87, III-14, 18 など]。但し、内容が行程の記録など公的な側面が強い場合には任務と見なし、官命旅行記の中を含めた [II-2, 31, 37, 64, 91, 92, 94]。

まず1) の場合であるが、これらは「使節旅行記 *sifarat-nāma*」とでも称されるべきもので、ヨーロッパ [II-9, 10, 78, 79, 82, 90, 91<sup>12)</sup>] やロシア [II-12, 17, 22, 33, 42, 45, 59, 60, 61, 62, 89] やインド [II-4, 5, 7, 83] に派遣された使節らによる旅行記が確認される。彼らは使節として派遣された際に、その本来の職務である条約の締結や慶弔の挨拶といった外交上の諸問題に対処するのみならず、その国の軍事顧問から軍事制度について教わり国家予算や歳入を調査する一方 [II-9]、その国の地理や歴史にも造詣を深め、政治的な問題点についても報告を行う [II-33] など、他国を知るための情報収集もまた怠ることはない。

このような使節旅行記の場合には、ヨーロッパやロシアに派遣された使節が圧倒的に多く、これは当時のガージャール朝宮廷にとって、イギリスやロシアが、ヘラート帰属問題といった領土問題の関係国ゆえに、外交上の最重要国であったためであることは言うまでもない。一方で当時の隣国インドの場合は、旅行記の数は少なくはないが、ヨーロッパに比して軽視されていたようで、ボンベイ総領事はヨーロッパ一辺倒の風潮に一石を投じるべく、インドの地理に関する書物を記すとその序文の中で述べているほどである [II-7: 2-4]。

何れにせよ、ヨーロッパやインドへの使節旅行記からは、自らの知見による情報に基づき、諸外国の優れた制度やその現状をシャーに報告することでイランの発展を求めようとする使節らの真摯な姿勢が窺えると同時に、その内容は、ガージャール朝の国際関係を研究する際には欠かせない情報を含んでいることは言うまでもない。

次に2) として、国内の情報収集や実地調査などのために派遣される官僚たちによる旅行記が挙げられる。彼らの任務は、地方長官のもとへの使い [II-21, 40, 73, 95] や、反乱の鎮圧や不穏な地方の情勢調査 [II-3, 11, 20, 23, 53, 54, 56, 75]、路程調査 [II-6, 15, 50, 51, 53, 70, 71, 72, 87]、電報局設置調査 [II-49, 81]、ダムの調査 [II-57, 58]、さらには通訳やミッションの案内役 [II-8, 24]、寄進レンガの運搬 [II-66] と、実に様々であるが、いずれの場合も、彼らは道中見聞したことを含め、地方の様々な状況をシャーや高官に報告する義務を有していたようである。

実地調査や情報収集のために派遣されている彼らの派遣先は、イラン国内にはほぼ限られてはいるが、ホラーサーン、スィースターン、フェールス、フーズスターン、アゼルバイジャンとイランの全域に及んでいることがわかる。ホラーサーン方面では、カラーテ＝ナーデリーやサラフス、グーチャーンといったロシア国境の諸都市に役人が派遣されており、先のロシアへの使節旅行記などとあわせ、当時のこの地域への関心の高さを表していよう。それと同様に、スィースターン・バルーチェスターンに関する旅行記も多く、この地域もまた、ペルシア湾岸やフーズスターンと並び、当時南方からイランに圧力をかけていたイギリ

---

12) Amin al-Dawla の生涯やその政治活動に関しては、彼の回想録や旅行記を中心に扱った Fragner 1979: 77-120 に詳しい。



スの脅威に対し、政府が何らかの手段を講じようとしていた結果と考えられる<sup>13)</sup>。すなわち、これらの国境付近あるいは中央から遠く離れた地方への役人らの調査旅行は、国境問題が英露との関係も含め重要な政治問題であった当時のイランにとって、国境線や地方へ至るルートを確認し、その地方の実態を知るための有効な手段であったと見なすことができるのである。トルコとの国境画定のために、1265-71/1849-54年まで6年をかけてイラン西部を徒歩で調査した記録 [II-16] などはその最たるものと言えよう。

ところで当時、このような実地調査の際に重要な役割を果たしたのが技師 (muhandis) である。表IIからは数人の技師の名前が確認できるが [II-6, 13, 24, 36, 53, 58, 87]、おそらく彼らは Dār al-Funūn (王立理工科学校) の教師や学生たちであったと考えられ<sup>14)</sup>、その主な任務は、道路や電線敷設の調査など、技師としての能力を生かしたものであり、さらにまた、対象となる地方や町の地図の作製が重要な任務として課せられていた。17世紀のシャルダンには、「イラン人は地図をもたない」と伝えていたが、イランにおける地図製作の萌芽がこの時期に見られることは、上述の国境線の確定による領土国家の概念とも相まって、今後考察に値する注目すべき問題であろう。

以上述べたように、実地調査報告書の場合、執筆者は、政府が「(その地方の) 状況により通曉するように」 [II-71: 2] との目的でもって実際の測量の結果などを記録しているために、他の旅行記と比べ、地理的な情報や地方の様子が具体的かつ詳細に記録されている。また、個人的な事柄について述べたり、単に興味本位の珍奇なものの紹介に終わったりはせず、調査対象地の歴史や風俗習慣、村落の規模、部族や少数派の状況、農業の様子や徴税額の見積もり、地方長官の対応および彼らの中央政府への帰属意識などについても言及されている場合がある。さらに、地方での政治的問題点を指摘する一方、自らの意見や見解を述べることもある。これらのことから、国家の官僚の目から見たイラン国内の情勢報告は、地理的な情報のみならず、中央と地方との関係についても示唆に富むなど、政治的・社会的にも重要な内容を含む史料であることが明らかであろう<sup>15)</sup>。この点において、文体においては無

13) Nāṣir al-Dīn Shāh は、1288/1871年に、「イギリス調査隊の15日前には、スィースターンの地図とその状況をシャーに報告するよう」との命令を下し、役人を派遣している [Kirmānī: 19]。

14) 最初期の地図の一つであるテヘランの地図 (Najm al-Mulk の監督下 1309/1891年作製) の端書には、製作に携わった Dār al-Funūn の関係者として数人の名前が記されている。彼らのうち、Muḥammad Mīrzā Muhandis は当時最も有能な技師の一人であったと考えられる。彼の生涯についてはさほど明らかになっていないが、Dār al-Funūn で学び、その後数十年間ガーニール朝宮廷に仕え、その間にイラン国内外の各地を旅し、道の状況や測量、地図の製作を行っていたようである。彼の著書は II-6, 53, 87, III-9, 80 の他に、*Jughrāfiyā-yi Rūdbār*, *Jughrāfiyā-yi Tārikhi-yi Māzandarān* などイラン国内の地理に関するものが多く、すべて彼の調査旅行に際して書かれたものである。

15) 本稿では扱わなかったが、官命を受けた旅行の産物として、旅行記ではなく地理書 (*jughrāfiyā*) の形態で献呈されている場合も多数存在する [Munzawī 1374s: 159-264]。今後、動的な視点の旅行記と静的な視点の地理書といった叙述史料を重ね合わせることで、当時のイランの地方の状況をより深く検討することが可能となろう。

味乾燥とも言える役人によるこれらの旅行記は、外国人の見たイラン観察記とは全く異なる視点から様々な情報を提供しており、イラン国内の地域研究を行う際には必要不可欠な史料となり得るのである。

ここで興味深いことに、官命旅行記全体の特徴として、君主の治世ごとによるそれらの分布を見ると、Nāṣir al-Dīn Shāh の時代に 73 点と、全体の 8 割近いものがこの時期に集中して書かれていることが明らかとなる〔48 頁表参照〕。彼の時代が半世紀近くに及んでいたとはいえ、周遊旅行記や巡礼旅行記の場合、彼の治世中に書かれたものは全体の約半数であるという事実と照らし合わせてみると、官命旅行記に限っては、この時代に集中的に書かれたと見なすことができよう。その上、この種の旅行記は、Fath 'Alī Shāh や Muḥammad Shāh の時代にも多い一方で、Nāṣir al-Dīn Shāh 以後は大幅に数が減っている。この点に関しては、今後さらなる検討が必要であろうが、官命旅行記の大半はシャー自身が命令を与えて調査に向かわせていることから、それぞれのシャーの国政に対する姿勢の相違が表れているようにも思われるのである。

### 3 巡礼旅行記 (safarnāma-yi ziyāratī)

最後に、「巡礼旅行記」としてまとめられる旅行記が存在するが、巡礼旅行記とは、メッカ巡礼 (hajj, 'umra) や、アタバート・マシュハドといった歴代イマームの墓廟への参詣 (ziyārat) を目的とした旅の際に書かれた一連の旅行記を指し、ここでは 81 点が数えられる。

巡礼旅行記の中でもメッカ巡礼記はこれまでも様々な形で紹介が為され、詳細な研究も数多く出されているため<sup>16)</sup>、ここでは、イラクのアタバート (ナジャフ・カルバラー・サーマラー・カーズィマイン)、イラン国内のマシュハドおよびゴムといったシーア派聖地参詣の旅を記した旅行記もまた、多数存在することを指摘しておきたい<sup>17)</sup>。中でも、表Ⅲからも明らかなように、アタバートに関する旅行記は 36 点と、メッカの 43 点と比較しても決して少なくはない。この 36 点のうち、メッカ巡礼の前後にアタバートに立ち寄りという形式を取らない、独立したアタバート参詣記は 20 点存在する。これはガージャール朝期にオスマン朝との関係が改善され、アタバートへの参詣が増加したことに基づいており、他の時代にはあまり見られないこの時代特有の現象である。

マシュハドへの参詣記 (12 点) はメッカやアタバートに比べるとはるかに少ない。また、

16) イラン人のメッカ巡礼旅行記を扱った研究としては、Fragner 1979: 20-24, Farāhānī [III-57] を中心とした坂本氏の一連の研究 1982, 1992, 2000, およびイラン人のメッカ巡礼を様々な観点から包括的に扱った Ja'fariyān 1379s などがある。

17) イラン人のアタバート参詣に関しては、小牧 1991 が 1870 年の Nāṣir al-Dīn Shāh の参詣を詳しく紹介している。

ゴムの場合、独立した旅行記はさらに少なくなるが（8点）、ゴムはテヘランから南方へ向かう際には必ず立ち寄る聖地であり、そのルートを辿るほぼすべての旅行記から、ゴムのマースーメ廟への参詣の様子は明らかとなる。他に、国内の主要な聖地としてはテヘラン南方のレイにあるアブドゥル・アズィーム廟が挙げられるが、この廟への参詣を扱った独立した旅行記は存在しない。しかし、この廟はテヘランを出発した最初の宿泊地となっており、ゴム同様に他の旅行記からこの廟への参詣の様子を確認することは可能である。

この他、巡礼旅行記としては異色のものとして、エスファハーンからマシュハドまでの聖者廟を名前と簡単な経歴を付して紹介したもの [III-77] や、技師としての職業柄か参詣の際にも道の状況や地理を詳細に記録する Muḥammad Mirzā Muhandis の 2 書 [III-9, 80] がある。また、Mahdī Qulī Khān Hidāyat のメッカ巡礼記 [III-64] は、メッカ巡礼の前に中国や日本を訪れ、巡礼後もヨーロッパを周遊するといった世界一周旅行記であるが、彼の場合、イランを発つ主な理由が、失脚した宰相 Amin al-Sultān Atābak の「メッカ巡礼」に同行することであったため、メッカ巡礼は身の危険を感じる高官にとってイラン脱出の最も有効な口実であったことが知れよう<sup>18)</sup>。このことは、Atābak の前に宰相であった Amin al-Dawla [III-52] もまた、失脚後故郷に戻りそのまま程なくしてメッカ巡礼のためにイランを出国していることから確認され、メッカ巡礼の別の側面がこれらの旅行記から浮かび上がるのである。

ところで、比較的簡単に旅することのできたマシュハドやゴムなど国内にある聖地に比して、メッカやアタバートへの巡礼の様子を旅行記に記録する主たる目的は、周遊旅行記に顕著な異国の紹介というよりもむしろ、「(巡礼を行う)すべてのムスリムの益となるために」 [III-80: 286] であり、読者に対して、巡礼時の問題点、巡礼の日程、宿泊施設、費用、旅中の危険性などを知らしめる、巡礼の際の指南書となることを意図して書かれている。そのため、彼らの中には、さして内容が新しくない場合、他の者と重ならないようにすべく、内容の省略といった事態も見受けられる [III-72: 233-234]。

以上、巡礼旅行記からは、巡礼ルートや巡礼のやり方など、巡礼に関わる様々なことがわかると同時に、一つのテーマにおける 150 年に及ぶ豊富な史料状況から、聖地そのものや巡礼の時代的な変遷を追うことも可能である。殊に、これまで十分に注意が払われてこなかったイラン人のシーア派聖地参詣の実態を考察することで、ガージャール朝時代の巡礼の全体像を把握し、当時のイラン人の精神世界や宗教観を検討することにまで踏み込んだ、より包括的な研究がこれらの史料に基づいて行えよう。

18) 宰相 Atābak は、失脚後わずか 1 週間で、「7 ヶ月以内に帰国」との条件付でメッカ巡礼に出るが、ガズヴィーンあたりまではどのルートでメッカに向かうのか、Hidāyat ら同行者にも知らせない気の配りようであった [III-64: 5-7]。

## おわりに

本稿ではガージャール朝時代のイラン人自身の手になるペルシア語旅行記 283 点を、「周遊旅行記」「官命旅行記」「巡礼旅行記」の三種に分類して紹介した。これら多数の旅行記文献は、17 世紀には「旅行嫌い」で「他の国々の現状にはなほだ無知」であったイラン人が、その時代とはうって変わって、好奇心を持ち合わせて、イラン国内のみならず世界各地へ赴いた産物である。本稿では個々の旅行記について詳細に扱うことはしなかったが、その各々に特徴があり、それらからは、イラン人の見た異国や異文化、イラン国内のルートや地方の状況、シーア派聖地をも含めた巡礼の実態や意義など、当時のイラン社会やイラン人の関心・問題意識を様々な観点から明らかにすることが可能となる。

最後に、これほど多くの旅行記が書かれた背景について一言付言すれば、ガージャール朝時代とは、外国、特に先進国として世界をリードしていたヨーロッパとの接触による内省の時代、換言すると、外部からの影響を受けたイランが、政府やその高位高官レベルにおいて、自己認識や自己再発見の模索を始めた時代であると言えるのではなかろうか。ヨーロッパからの技術や文化の流入は、政府を筆頭に、有力者や知識人をして、ヨーロッパに目を向けさせ、一方イギリスやロシアの圧力により生じた国境問題は、政府をして、それまでさほど注意を払うことのなかった地方に対して、確実な情報を求める意識を喚起させた。ヨーロッパ旅行記が多数存在することや、自国の内情を知ろうと努めた役人の報告書などはその証左であろう。すなわち、当時の政府の関心は、諸外国の動向を知り、その優れた点を取り入れようとする一方で、国内に対しては、ルートの開発や地図の作製といった地理的な知識の収集に加えて、各地方の歴史的・文化的な側面あるいはその帰属意識の把握にも向けられている。献呈される旅行記からは、常にその時々地方や他国の状況を知ることができるのである。ゆえに、旅行記が最も多く執筆されていた Nāṣir al-Dīn Shāh 期は、単に旅行記執筆が文化面での流行であったということだけではなく、地方や他国を知ろうとする政府の政策的意図が強かったのではなかろうか。この点に関しては今後さらなる検討が必要であろうが、当時なぜこれほど多量の旅行記が書かれたのかという問題に対する一つの解釈として提示しておきたい。

以上見てきたように、旅行記とは、単に文学的な興味や関心を満たす側面のみならず、当時のイランの政治的・社会的な世相をも映し出す第一次史料でもあるのである。それゆえ、ガージャール朝時代を研究するにあたり、年代記や文書史料および西洋人によるイラン観察記と並んで、イラン人自身によって著された旅行記などの叙述史料を利用することで、政治・社会・文化の各方面から当時の社会状況や人々の関心などについて、より一層研究を深めていくことが可能であると考えられる次第である。

## I 一周遊旅行記

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地等)
1	Āyina-yi 'Ibrat	Muhammad Kāzīm Ulfat Iṣfahānī	14 c	エスファハーン・シーラーズ・インド
2	Badāyi' al-Āthār <sup>1)</sup>	Maḥmūd Zarqānī	?	アメリカ
3	Barf wa Yakh	Wāziḥ Bukhārā'i	1288	ケルマーンシャー
4	Bustān al-Siyāḥa <sup>2)</sup>	Zayn al-'Ābidīn Shirwānī	1248	アフガニスタン・インド・アラビア・シリア・エジプト・トルコ・アルメニア
5	Tāriḫ-i Sarguzasht-i Mas'ūdi <sup>3)</sup>	Mas'ūd Mirzā Zill al-Sulṭān	1323	エスファハーン・エラーク=アラブ・フェールス・ロレスタン
6	Tabṣīrat al-Musāfirīn	Muḥammad Ḥasan Ṭabāṭabā'i Tabrizī	1270 - 1308	タブリーズ・トルコ・マシュハド
7	Tuḥfat al-Sālikīn	Mu'ayyad Zafar 'Alī Shāh	1324	?
8	Tuḥfat al-'Ālam wa Zayl-i Tuḥfat <sup>4)</sup>	'Abd al-Laṭīf Shūshtarī	1216 - 19	シュージュタル→バスラ・インド
9	Tuḥfat al-Fuqarā' <sup>5)</sup>	'Alī Khān Ṣafā' al-Salṭana Mushtāqī Nā'ini	1300	マシュハド→タバス・ヤズド・ナーイン・テヘラン
10	Tuḥfat al-Mulūk	Mirzā Aḥmad Ṭabāṭabā'i	1275	インド
11	Ḥikāyāt-i Nādīra fī Safar-i Āgra	'Abd Allāh Wazīr Khān	1279	アグラ
12	Khāṭirāt	?	1919 AD	ヨーロッパ
13	Rukn al-Asfār	Ghulām Ḥusayn Khān Afzal al-Mulk	1331	マーザンダラーン
14	Rumūz al-Siyāḥa <sup>6)</sup>	Najaf Qulī Mirzā	1251 - 52	Rizā Qulī Mirzā らのイラク・ヨーロッパ行
15	Rūznāma-ya Safar-i Fārs	Farḥād Mirzā Mu'tamad al-Dawla	1257 - 58	フェールス
16	Rūznāma-ya Safar-i Khurāsān	Sayyid Jalāl Būrānī	13 - 14c	ホラーサーン
17	Rūznāma-ya Safar-i Duwwum-i Farangistān <sup>7)</sup>	Nāṣir al-Dīn Shāh	1295	ヨーロッパ
18	Rūznāma-ya Safar-i Farangistān <sup>8)</sup>	Nāṣir al-Dīn Shāh	1290 - 91	ロシア・ヨーロッパ
19	Rūznāma-ya Safar-i Gilān <sup>9)</sup>	Nāṣir al-Dīn Shāh	1286	ギーラーン
20	Rūznāma-ya Safar-i Nishābūr	Muḥammad Āghā Mu'āwin al-Fuqarā'	?	ニーシャープール
21	Rūznāma-ya Safar-i Humāyūn ba-Māzandarān <sup>10)</sup>	Muḥammad Ḥasan Khān I'timād al-Salṭana	1292	Nāṣir al-Dīn Shāh のマーザンダラーン行
22	Rūznāma-ya Shikār-i Kun wa Sūlqān	Malik Qāsim Qājār	1266	Nāṣir al-Dīn Shāh の狩猟の記録
23	Rūznāma-ya Farīd al-Mulk <sup>11)</sup>	Muḥammad 'Alī Farīd al-Mulk Hamadānī	1315 - 18	フーズスターン・インド・ヨーロッパ
24	Rūznāma-ya Waqāyi'-i Safar-i Mughān	Muzaffar al-Dīn Shāh	?	タブリーズ→モガン
25	Rah-āward <sup>12)</sup>	Ḥasan Waḥīd Dastgirdī	1311?	チャハール=マハール・エスファハーン
26	Riyāz al-Siyāḥa <sup>13)</sup>	Zayn al-'Ābidīn Shirwānī	1242	イラン
27	Sarguzasht wa Safarnāma	Abū Turāb Faṣl Allāh Khāwari Sharīfī Shirāzī	1257	?
28	Safarnāma	Mirzā Asad Allāh Khān Isfandiyārī	13 - 14c	ベルシア湾
29	Safarnāma	Mirzā Rizā Tibyān al-Mulk	1341	レザーイエ
30	Safarnāma <sup>14)</sup>	Ḥujjat al-Islām-zāda Uskū'i	1343?	?

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地等)
31	Safarnāma	Aḥmad Khān Sartip Kabā'i Shirāzi	1309	テヘラン
32	Safarnāma <sup>15)</sup>	'Ali Ṣafā 'Ali Shāh Ḍāhir al-Dawla	1324	ハマダーン
33	Safarnāma	Muḥammad 'Ali Pish-khidmat	1300	タブリーズ→テヘラン
34	Safarnāma	Maḥmūd Farrukh	?	ロンドン
35	Safarnāma	Maḥmūd Khān Fasā'i	1317	シーラーズ→エジプト・イスタンブール
36	Safarnāma	Shaykh Muḥammad Māzandarāni	1327	ナジャフ→テヘラン
37	Safarnāma	Mirzā Muḥammad 'Ali Khān Mu'in al-Salṭana	1318	パリ
38	Safarnāma	pish-khidmat	14c	?
39	Safarnāma <sup>16)</sup>	Yār Muḥammad Khān Sahām al-Dawla	1307, 1312	ボジュヌルド→テヘラン
40	Safarnāma-yi Ibrāhīm Ṣaḥḥāf-bāshī Ṭīhrāni <sup>17)</sup>	Ibrāhīm Ṣaḥḥāf-bāshī Ṭīhrāni	1314-15	ヨーロッパ・アメリカ・日本・香港・シンガポール・インド
41	Safarnāma-yi Āzarbāijān	Mirzā 'Abd al-Ḥusayn Sarrishtadār	1303	アゼルバイジャン
42	Safarnāma-yi Ištānbūl	Shaykh al-Ra'is Ḥayrat Qājār	?	イスタンブール
43	Safarnāma-yi Iṣfahān <sup>18)</sup>	Mirzā Muḥammad Ṣāliḥ Shirāzi	1227	エスファハーン→テヘラン
44	Safarnāma-yi Iṣfahān <sup>19)</sup>	'Abd al-Ḥusayn Malik al-Mu'arrikhīn Kāshāni	1332	エスファハーン
45	Safarnāma-yi Iṣfahān	?	1343	エスファハーン
46	Safarnāma-yi Awāns	Awāns Khān Armani	?	ヨーロッパ・日本・韓国
47	Safarnāma-yi Banāniya	Banān Daftar Rizā'i	1313	?
48	Safarnāma-yi Tabbat wa Turkistān	Sayyid 'Izzat Allāh	1227-28	チベット・トルケスタン
49	Safarnāma-yi Tīhrān	Muḏaffar al-Dīn Mirzā	1306	タブリーズ→テヘラン
50	Safarnāma-yi Chaman-i Sulṭāniya	Sām Mirzā Mulk Ārā	1275-76	Nāṣir al-Dīn Shāh のスルターニーエ行
51	Safarnāma-yi Ḥājji Pīr-zāda <sup>20)</sup>	Muḥammad 'Ali Ḥājji Pīr-zāda Nā'ini	1306	インド・エジプト・ヨーロッパ・トルコ・シリア・イラク
52	Safarnāma-yi Khurāsān wa Kirmān <sup>21)</sup>	Ghulām Ḥusayn Khān Afzal al-Mulk	1301-02	ホラーサーン・ケルマーン
53	Safarnāma-yi Khwāf wa Bākhāz	Ḥātam Khū'i	1311	ハーフ・バーハルズ
54	Safarnāma-yi Khūy <sup>22)</sup>	Muḏaffar al-Dīn Mirzā	1307	タブリーズ→ホイ
55	Safarnāma-yi Khūy	Mirzā 'Abd al-Amīr Shaykh al-Islām	1325?	ホイ
56	Safarnāma-yi Khūzistān	Maḥmūd Mirzā Afshār	13-14c	Ḥusām al-Salṭana のフーゼスターン行
57	Safarnāma-yi Khīwa wa Bukhārā wa Samarqand	?	1863 AD	ヒヴァ・ブハーラー・サマルカンド
58	Safarnāma-yi Rūdbār	Khusraw Khān	1273	ロードバール
59	Safarnāma-yi Sanglākh <sup>23)</sup>	?	1288?	イラン・トルケスタン・トルコ・エジプト
60	Safarnāma-yi Siyāh-Kūh	Muḥammad Ḥasan Khān Ṣan' al-Dawla	13c	シヤーフクーフ
61	Safarnāma-yi Shirāz	'Abbās Iqbāl Āshtiyāni	1303	エスファハーン→シーラーズ
62	Safarnāma-yi Shirāz	Mirzā Faḏl Allāh Sūdakhri	?	シーラーズ
63	Safarnāma-yi Shirāz <sup>24)</sup>	Mirzā 'Abd al-Wahhāb Khān Niḏām al-Mulk	1316	シーラーズ
64	Safarnāma-yi Shikāgū <sup>25)</sup>	Mirzā Muḥammad 'Ali Khān Mu'in al-Salṭana	1318?	シカゴ

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地等)
65	Safarnāma-yi Ṭawālish <sup>26)</sup>	Mirzā Abū al-Naṣr Ḥusām al-Salṭana	13-14c	タヴァーレシュ
66	Safarnāma-yi Ṭīhrān <sup>27)</sup>	Khāwar Bibi Shādlū	1316	ボジュヌルド→テヘラン
67	Safarnāma-yi Ṭūs	Ḥusām al-Salṭana	13-14c	トゥース
68	Safarnāma-yi 'Irāq-i 'Ajam <sup>28)</sup>	Nāṣir al-Dīn Shāh	1309-10	エラーケ=アジャム
69	Safarnāma-yi Fārs	Afkham al-Mulk	?	フェールス
70	Safarnāma-yi Farangistān <sup>29)</sup>	Mas'ūd Mirzā Ḥill al-Sulṭān	1323	エスファハーン→ヨーロッパ
71	Safarnāma-yi Farangistān <sup>30)</sup>	Muẓaffar al-Dīn Shāh	1317	ヨーロッパ
72	Safarnāma-yi Farangistān <sup>31)</sup>	Muẓaffar al-Dīn Shāh	1320	ヨーロッパ
73	Safarnāma-yi Farangistān	Muẓaffar al-Dīn Shāh	1323	ヨーロッパ
74	Safarnāma-yi Farangistān <sup>32)</sup>	Nāṣir al-Dīn Shāh	1306-07	ヨーロッパ
75	Safarnāma-yi Farangistān <sup>33)</sup>	Yār Muḥammad Khān Sahām al-Dawla	1319	ボジュヌルド→ヨーロッパ
76	Safarnāma-yi Farhūshī	'Alī Muḥammad Mutarjim	?	ホラーサーン→バフティヤリー
77	Safarnāma-yi Qarācha-Dāgh	Muḥammad Rizā Munshī	1306	Muẓaffar al-Dīn Mirzā のタブリーズ→ガラーチェダグ行
78	Safarnāma-yi Qarācha-Dāgh	Muẓaffar al-Dīn Mirzā	1292	タブリーズ→ガラーチェダグ・アルダビール
79	Safarnāma-yi Qafqāz	Majd al-Salṭana	1313	コーカサス
80	Safarnāma-yi Kajlar	?	13c	'Abbās Mirzā のタブリーズ→カジュラル行
81	Safarnāma-yi Kurdistān	Sulṭān Sartīb Muḥammad Ḥusayn Muḥājir Qarābāghī	1329	クルディスタン
82	Safarnāma-yi Kirmān	Ismā'īl Thāqīb Āshtiyānī	?	ケルマーン
83	Safarnāma-yi Kirmān	?	1309	タブリーズ→ケルマーン
84	Safarnāma-yi Kalkatta	Umid 'Alī Hālā'ī	?	カルカッタ
85	Safarnāma-yi Gilān wa Māzandarān wa Astarābād	?	1276	ギーラーン・マーザンダラーン・アスタラーバード
86	Safarnāma-yi Lārijān	'Alī Qulī Mirzā I'tizād al-Salṭana	1297	ラーリージャン
87	Safarnāma-yi Marāgha	Muḥammad Rizā Munshī	1305	Muẓaffar al-Dīn Mirzā のマラーゲ行
88	Safarnāma-yi Marāgha	Muẓaffar al-Dīn Mirzā	1308	マラーゲ・サーヴェジボラグ・ウルミエ
89	Safarnāma-yi Hindūstān	Maḥmūd Shirāzī	1309	シーラーズ→ボンベイ
90	Safarnāma-yi Hindūstān	Abū al-Ḥusayn Mirzā Shaykh al-Ra'īs Qājār	?	インド
91	Safarnāma-yi Hindūstān	Mīr Sayyid 'Alī Niyāz	1230?	ブーシェフル→インド
92	Safir-i Sāmīrī wa Safar-i Nāṣiri	Ghulām Ḥusayn Khān Afzal al-Mulk	1301	カラールグシュト・ターレガン・アタバート→テヘラン
93	Sawāniḥ-i Safar	Muḥammad Muḥsin 'Āṣī Rashtī Iṣfahānī	1267	エスファハーン→ラシュト
94	Sawāniḥ-i Safar-i Khurāsān	Muḥammad Karīm Khān Kirmānī	1267	ホラーサーン
95	Siyāḥatnāma	'Abd al-Karīm Mushtāq	1841 AD	イギリス
96	Siyāḥatnāma-yi Ḥājji Sayyāḥ <sup>34)</sup>	Muḥammad 'Alī Sayyāḥ Maḥallātī	1276-94	ヨーロッパ・アメリカ・日本・中国・インド
97	Kitābcha-yi Musāfarat-i 'Arabistān wa Luristān	'Abd Allāh Qarāguzlū	1308	アラベスターン・ロレスターン
98	Ganj-i Shāyigān	Mirzā Muḥammad Taqī Khān Ḥakīm-bāshī	1299	フーゼスターン・ロレスターン
99	Mir'āt al-Aḥwāl <sup>35)</sup>	Āqā Aḥmad Bihbahānī Kirmānshāhī	1225	イラク→インド
100	Musāfarat-i Tiflis	Mirzā Taqī Khān Ṭabīb	1288?	ティフリス
101	Muqābir-i Hind	Ismā'īl Ṣaḥḥāb-bāshī	13-14c	インド

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地等)
102	Maqşūd-i Jahān	Maḥmūd Mirzā Qājār	1242	ホッラムアーバード→冬営地
103	Hidāyat al-Şadriya fi al-Hidāyat al-Bashariya	?	14c	インド
104	Yaddāshthā-yi Safar-i Hamadān <sup>36)</sup>	Ibrāhim Şafā'ī	1292	ハマダーン

- <sup>1)</sup> Lithography, Bombay, 1914.  
<sup>2)</sup> Lithography, Tehran, 1315q.  
<sup>3)</sup> Khadiw-jam, H. (ed.), *Khāṭirat-i Zill al-Sulṭān*, vol. 1-2, Tehran, 1368s.  
<sup>4)</sup> Muwaḥḥid, Ş. (ed.), Tehran, 1364s.  
<sup>5)</sup> 1) Afshār, I. (ed.), FIZ 16, 1348s., pp. 90-190. 2) Gulbun, M. (ed.), Tehran, 1366s.  
<sup>6)</sup> Farmān-farmā'ī, A. (ed.), Tehran, 1361s. /Fraser, J. B. (tr.), London, 1838.  
<sup>7)</sup> Afshār, I. (ed.), Tehran, 1363s. /Houtum-Schindler, A. & L. de Norman (trs.), London, 1879.  
<sup>8)</sup> 1) Mustawfī, 'A. (ed.), Esfahan, 1343s. 2) Qāzihā, F. (ed.), Tehran, 1379s. /Redhouse, J. W. (tr.), London, 1874, repr. California, 1995.  
<sup>9)</sup> 1) Siūda, M. (ed.), Tehran, 1367s. 2) Qāzihā, F. (ed.), Tehran, 1377s.  
<sup>10)</sup> Offset of 1314q., Tehran, 1356s.  
<sup>11)</sup> Farīd, M. (ed.), Tehran, 1354s.  
<sup>12)</sup> Lithography, 2vols., Tehran, 1311s.  
<sup>13)</sup> Rabbānī, A. Ḥ. (ed.), Tehran, 1362s.  
<sup>14)</sup> Lithography, Mashhad, 1303s.  
<sup>15)</sup> Afshār, I. (ed.), Tehran, 1367s., pp. 53-84.  
<sup>16)</sup> Rawshani Za'frānlū, Q. (ed.), *Safarnāma-yi Sahām al-Dawla*, Tehran, 1374s., pp. 25-149.  
<sup>17)</sup> Mushiri, M. (ed.), Tehran, 1357s.  
<sup>18)</sup> Afshār, I. (ed.), MII 7, 1377s., pp. 255-284.  
<sup>19)</sup> Ja'fariyān, R. & 'A. Ramazān (eds.), MII 3, 1375s., pp. 17-63.  
<sup>20)</sup> Farmān-farmā'iyān, Ḥ. (ed.), Tehran, 2vols., 1342-43s.  
<sup>21)</sup> Rawshani Za'frānlū, Q. (ed.), Tehran, 1360s.  
<sup>22)</sup> Farmān-farmā'iyān, Ḥ. (ed.), Tehran, 1342s.  
<sup>23)</sup> Lithography, Tabriz, 1291-95q.  
<sup>24)</sup> Afshār, I. (ed.), FIZ 13, 1344s., pp. 188-278.  
<sup>25)</sup> Shahīdī, H. (ed.), Tehran, 1363s.  
<sup>26)</sup> Şafawī, I. (ed.), Tehran, 1346s.  
<sup>27)</sup> Rawshani Za'frānlū, Q. (ed.), *Safarnāma-yi Sahām al-Dawla*, Tehran, 1374s., pp. 173-220.  
<sup>28)</sup> Offset of 1311q., Tehran, 1362s.  
<sup>29)</sup> Khadiw-jam, Ḥ. (ed.), *Khāṭirat-i Zill al-Sulṭān*, vol. 3, Tehran, 1368s.  
<sup>30)</sup> Shirāzī, A. (ed.), Tehran, 1363s.  
<sup>31)</sup> Dihbāshī, 'A. (ed.), Tehran, 1361s.  
<sup>32)</sup> Riẓwānī, M. I. & F. Qāzihā (eds.), 3vols., Tehran, 1373-78s.  
<sup>33)</sup> Rawshani Za'frānlū, Q. (ed.), *Safarnāma-yi Sahām al-Dawla*, Tehran, 1374s., pp. 151-172.  
<sup>34)</sup> Sayyāḥ, Ḥ. (ed.), Tehran, 1346s. /Deyhim, M. N. (tr.), Mariland, 1998.  
<sup>35)</sup> Dawānī, 'A. (ed.), Tehran, 1375s.  
<sup>36)</sup> Lithography, n. p., 1337q.



## II—官命旅行記

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地・任命者等)
1	Aḥwāl-i Chīn	Edward Birjis, Mirzā Ṣādiq	1261	中国 (Bahman Mirzā)
2	Urdū-yi Humāyūn <sup>1)</sup>	Muḥammad Ḥasan Khān I'timād al-Salṭana	1300	Nāsir al-Dīn Shāh のホラーサーン行の記録
3	Badāyi' al-Samar wa Waqāyi' al-Safar	Shaykh al-Ra'is Qājār	1292	マシュハド→グーチャーン懐柔のための使節
4	Tārīkh-i Sifārat-i Ḥājji Khalil Khān wa Muḥammad Nabī Khān <sup>2)</sup>	?	1216-21	インドへの使節 (FA)
5	Tuḥfat al-Khāqāniya	Sulṭān Abū al-Faṭḥ Ḥasani Ḥusaynī	1231	セバーハーン→インド (FA)
6	Jughrāfiyā wa Nām-i Manāzil az Tīhrān ba-Shīrāz <sup>3)</sup>	Muḥammad Ḥasan Mirzā Muhandis, 'Alī Khān Muhandis	1307	テヘラン=フェールス間の路程調査
7	Jam-i Jam-i Hindūstān <sup>4)</sup>	'Alī Khān Wiqār al-Mulk Ḥijāji Tabrizi	1316	ボンベイ総領事
8	Ḥālāt wa Akhbār <sup>5)</sup>	Mirzā Jān Shirāzi	13c	シーラーズ→エスファハーン通訳
9	Ḥayrat-nāma-yi Sufarā' <sup>6)</sup>	Abū al-Ḥasan Khān Shirāzi	1224-25	イギリスへの使節
10	Khulāṣa-yi Waqāyi' wa Sharḥ-i Aḥwāl-i Ḥusayn 'Alī Khān	Ḥusayn 'Alī Khān	?	フランス・イギリスへの全権公使
11	Dāfi' al-Ghurūr <sup>7)</sup>	'Abd al-'Alī Khān Adīb al-Mulk	1275	アゼルバイジャンの不正調査
12	Dalil al-Sufarā' <sup>8)</sup>	Muḥammad Ḥādī Shirāzi	1229-31	Abū al-Ḥasan Khān のロシア使節団の記録
13	Rāpūrt-i Siyāhat-i Miṣr	Muḥammad Mirzā Muhandis	1296	エジプト (N)
14	Rāpūrt-i Kalāt-i Nādīri	?	1309	マシュハド→カラテ=ナーデリー
15	Rāpūrt-i Gardash dar Kūhistānhā	Sulaymān Muhandis	1298	ガズヴィーン=ギーラーン間の舗装道路選定
16	Risāla-yi Sarḥaddiyya <sup>9)</sup>	Ja'far Khān Mushīr al-Dawla Tabrizi	1265-71	イラン=トルコ国境調査団 (Mirzā Āqā Khān Nūri)
17	Rūznāmcha-yi Ma'mūriyat-i Rūsiya	Zū al-Faqār	?	ロシアへの使節
18	Rūznāmcha-yi Mamlakat-i Khurāsān <sup>10)</sup>	?	13c	ホラーサーン (N)
19	Rūznāma-yi Sifārat-i Īshik Āghāsī	Ma'šūm Khān Īshik Āghāsī	1301	ホラーサーン→カーブルへの使節 (Rukn al-Dawla)
20	Rūznāma-yi Safar-i Astarābād <sup>11)</sup>	?	1263	アスタラーバードへの懲罰軍
21	Rūznāma-yi Safar-i Burūjird	Ja'far Qulī Khān	13c	ボルージェルドへの使者 (N)
22	Rūznāma-yi Safar-i Khwārazm <sup>12)</sup>	Muḥammad 'Alī Khān Ghafūr	1257	ホラズムへの使節団の記録 (M)
23	Rūznāma-yi Safar-i Qā'in <sup>13)</sup>	Mirzā Khānlar Khān I'tiṣām al-Mulk	1293-94	ガーエンの情勢報告
24	Rūznāma-yi Safar-i Kirmān	Mirzā Riẓā Khān Sarbāz-i Muhandis	1322	ケルマーンへのインド貿易ミッションに同行 (Mushīr al-Dawla)
25	Rūznāma-yi Safar-i Landan <sup>14)</sup>	Mirzā Khānlar Khān I'tiṣām al-Mulk	1280-81	タブリーズ→ティフリス・ロンドン
26	Rūznāma-yi Safar-i Muḥammad Taqī	Muḥammad Taqī Pīsh-khidmat Tajrīshī	13c	ハマダーン
27	Rūznāma-yi Safar-i Mirzā Naṣr Allāh Sulṭān	Mirzā Naṣr Allāh Sulṭān	1241	マシュハド
28	Rūznāma-yi Safar-i Hirāt <sup>15)</sup>	?	1268	ヘラートへの使者 (N)

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地・任命者等)
29	Rūznāma-yi Siyāhat	Mirzā 'Alī Sarrishādār	1278	タブリーズ→テヘラン
30	Rūznāma-yi Musāfarat-i Kalāt	Mirzā Ḥasan Khān Sipāhsālār	1298	マシュハド→カラテ=ナーデリー
31	Zubdat al-Āthār	Abū Naṣr Faṭh Allāh Kāshāni Shaybāni	13c	Nāṣir al-Dīn Shāh の旅行の記録
32	Sarguzasht-i Ḥishmat al-Dawla	Ibrāhīm Qulzūm Iṣfahāni	?	Ḥishmat al-Dawla のホラーサーン統治の記録
33	Sifārat-nāma-yi Khwārazm <sup>16)</sup>	Rizā Qulī Khān Hidayat	1268	ホラズムへの使節 (N)
34	Safarnāma <sup>17)</sup>	Mirzā Ḥasan Khān Munshī	1300	'Izz al-Dawla のロシア行に随行
35	Safarnāma <sup>18)</sup>	Ṭāhir Khān Iftikhār Niẓām	1300	'Izz al-Dawla のロシア行に随行
36	Safarnāma-yi Āzarbāijān <sup>19)</sup>	Sulaymān Khān Muhandis	1293 - 94	タブリーズでマドラサ開設
37	Safarnāma-yi Āzarbāijān <sup>20)</sup>	ṣāhib-i nasaq	1296 - 97	Muẓaffar al-Dīn Mirzā のアゼルバイジャン行に随行
38	Safarnāma-yi Ālmān	Yaḥyā Nāmī	1306?	Nāṣir al-Dīn Shāh の訪独関係の文書集
39	Safarnāma-yi Iṣfahān	?	13c	Zill al-Sulṭān のエスファハーン行の記録
40	Safarnāma-yi Iṣfahān wa Fārs	?	1303	エスファハーン・シーラーズへの使者
41	Safarnāma-yi Amin Lashkar <sup>21)</sup>	Mirzā Qahramān Amin Lashkar	1300	Nāṣir al-Dīn Shāh のホラーサーン行に随行
42	Safarnāma-yi Bukhārā	?	?	ブハーラーへの使節 (FA)
43	Safarnāma-yi Balūchistān <sup>22)</sup>	'Alā' al-Mulk	?	バルーチェスターン
44	Safarnāma-yi Balūchistān	?	?	バルーチェスターン報告 (Zill al-Sulṭān?)
45	Safarnāma-yi Piṭruzbūrh <sup>23)</sup>	Mirzā Ḥasan Munshī Asrār	1298	ロシアへの弔問団の記録
46	Safarnāma-yi Tabriz <sup>24)</sup>	Wālī Khān Araklī	1266	タブリーズ (N)
47	Safarnāma-yi Turkmanistān <sup>25)</sup>	'Abd Allāh Qarāguzlū	1294 - 96	トルクメニスタン
48	Safarnāma-yi Tiflis-Tihirān <sup>26)</sup>	Muḥammad Ḥasan Khān I'timād al-Salṭana	1290	Nāṣir al-Dīn Shāh の訪欧帰国時にティフリスにて残務
49	Safarnāma-yi Tihirān-Shāhrūd-Ṭūs	?	1293	電線敷設調査 (Mukhbir al-Dawla)
50	Safarnāma-yi Tihirān-Qazwin	?	1266	ガズヴィーン (N)
51	Safarnāma-yi Junūb-i Irān <sup>27)</sup>	?	1256	エスファハーン→シーラーズ・ブーシェフル (Mh)
52	Safarnāma-yi Khurāsān <sup>28)</sup>	Muḥammad 'Alī Munshī	1299	Rukn al-Dawla のサラフス行の記録
53	Safarnāma-yi Khurāsān <sup>29)</sup>	Muḥammad Mirzā Muhandis	1295	ホラーサーン地方の調査 (N)
54	Safarnāma-yi Khurāsān wa Sistān <sup>30)</sup>	Muḥammad Ibrāhīm Khudābandalū	13c	ホラーサーン・スィースターン (N)
55	Safarnāma-yi Khwārazm	Lala-bāshī Chārdahi Kalāta Dāmghāni	?	トルコマン・ホラズム (N)
56	Safarnāma-yi Khwārazm wa Khiwaq <sup>31)</sup>	Ismā'il Sarhang	1280	サールーク・ヒヴァの鎮圧 (N)
57	Safarnāma-yi Khūzistān	chākiri-i 'Abd al-Qādir	1306	Najm al-Mulk 報告の見積り確認
58	Safarnāma-yi Khūzistān <sup>32)</sup>	'Abd al-Ghaffār Najm al-Mulk	1298 - 99	アフワーズのダム調査 (N)
59	Safarnāma-yi Rūsiya <sup>33)</sup>	Muṣṭafā Khān Bahā' al-Mulk Afshār	1244	Mirzā Maṣ'ūd のタブリーズ→ペテルブルグ行の記録 ('Abbās Mirzā)
60	Safarnāma-yi Rūsiya <sup>34)</sup>	'Abd al-Ṣamad Mirzā 'Izz al-Dawla	1300	モスクワ・ペテルブルグへの代表团 (N)
61	Safarnāma-yi Rūsiya <sup>35)</sup>	?	1298?	マシュハド→アシハバード祝賀使節 (Rukn al-Dawla)

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地・任命者等)
62	Safarnāma-yi San Piṭrūzbūrg	Ḥabib Allāh Afshār Qazwīnī	1271	Sayf al-Mulk Mir-panja のロシア弔問の記録
63	Safarnāma-yi Shirāz	Muḥammad Taqī Mirzā Rukn al-Dawla	?	シーラーズの鉄道敷設調査 (N?)
64	Safarnāma-yi 'Abbās Mirzā	Muḥammad Ja'far Illāhi	13c	'Abbās Mirzā のアゼルバイジャン→イラン東部遠征の記録
65	Safarnāma-yi 'Atabāt <sup>36)</sup>	Muḥammad Ḥusayn Ra'īs al-Kitāb	1287	Nāṣir al-Dīn Shāh のアタバート行程記録
66	Safarnāma-yi 'Atabāt <sup>37)</sup>	'Alī Rizā 'Aẓud al-Mulk	1283 - 84	アタバートへ寄進のレンガを運搬 (N)
67	Safarnāma-yi 'Izz al-Dawla <sup>38)</sup>	'Abd al-Ṣamad Mirzā 'Izz al-Dawla	1290	Nāṣir al-Dīn Shāh の訪欧に随行
68	Safarnāma-yi Farangistān	'Uyūq	1290	韻文による Nāṣir al-Dīn Shāh 訪欧の記録
69	Safarnāma-yi Qum <sup>39)</sup>	Ghulām Ḥusayn Khān Afzal al-Mulk	1310	'Alī Taqī Mirzā のゴム行に随行
70	Safarnāma-yi Kirmān <sup>40)</sup>	Firūz Mirzā Farmān-farmā	1298	ケルマーン→バルーチェスタン (N)
71	Safarnāma-yi Kirmān wa Balūchistān <sup>41)</sup>	Firūz Mirzā Farmān-farmā	1297	ケルマーン→バルーチェスタン (N)
72	Safarnāma-yi Kirmān wa Balūchistān	?	1288	バルーチェスタンの地図作製 (N)
73	Safarnāma-yi Luristān wa 'Arabistān	Ḥusayn 'Alī Khān Afshār	1266	フーゼスタンへの使節 (N)
74	Safarnāma-yi Māzandarān	?	1292	Nāṣir al-Dīn Shāh のマーザングラーン行の韻文での記録
75	Safarnāma-yi Marw <sup>42)</sup>	Sayyid Muḥammad Nūrī Lashkar-nawīs	1277	Ḥishmat al-Dawla のトルコマン鎮圧の記録
76	Safarnāma-yi Miṣr	?	?	エジプト・スーダン政情報告 (N)
77	Safarnāma-yi Mamasani <sup>43)</sup>	Mirzā Fattāḥ Khān Garmrūdi	1260 - 61	ママサニー・クーフギールーヤ調査 (Mh)
78	Safarnāma-yi Mirzā Ṣāliḥ Shirāzī <sup>44)</sup>	Mirzā Muḥammad Ṣāliḥ Shirāzī	1230	タブリーズ→ロンドン ('Abbās Mirzā)
79	Safarnāma-yi Mirzā Fattāḥ <sup>45)</sup>	Mirzā Fattāḥ Khān Garmrūdi	1253 - 55	Ḥusayn Khān の代理としてタブリーズ→フランス・イギリス
80	Safarnāma-yi Yazd	?	?	ヤズド (N)
81	Siyāhatnāma-yi Junūb	?	?	エスファハーン・ヤズド・ケルマーンでの電報局建設調査 (N)
82	Siyāhatnāma-yi Mushīr al-Dawla	Ja'far Khān Mushīr al-Dawla	1277	イギリスへの特命大使
83	Siyāhatnāma-yi Hindūstān	Mirzā Faẓl Allāh Khān Ḥusaynī	1290 - 94	ボンベイ駐在の外交官によるインド・ビルマ報告
84	Sharḥ-i Aḥwāl-i Quchān	Ibn Mirzā Muḥammad Ibrāhīm Mujtahīdī	1311	マシュハド→グーチャン弔問団
85	Shikārgāhhā-yi Ardabil	?	1283?	アルダビール近郊の狩場調査
86	'Ibrat li'l-Nāẓirīn	?	1284	Nāṣir al-Dīn Shāh のホラーサーン行に随行
87	Kitābcha - yi Musāfarat - i Fārs <sup>46)</sup>	Muḥammad Mirzā Muhandīs	1308	シーラーズ→ファールス地方の路程報告 (Farhād Mirzā)
88	Guzārish-i Afghānistān	Abū al-Ḥasan Qandahārī	?	アフガニスタンへの祝賀使節 (Ḥishmat al-Dawla)
89	Guzārish-i Sarakhs <sup>47)</sup>	'Abd Allāh Sarhang	1296	サラフス (N)
90	Guzārish-i Mirzā Malkum Khān	Nāẓim al-Dawla Ya'qūb Iṣfahānī	?	欧州大使
91	Makhzan al-Waqāyī' <sup>48)</sup>	Ḥusayn Surābī Munshī	1272 - 74	大使 Amin al-Dawla の欧州行の記録
92	Mir'āt al-Arẓ	Mirzā Muḥammad Khān Lawāsānī	1264	ロシアへの使節 (N)
93	Mir'āt al-Safar wa Mishkāt al-Ḥāzar <sup>49)</sup>	Muḥammad Ḥasan Khān l'timād al-Salṭana	1295	Nāṣir al-Dīn Shāh のホラーサーン行の記録
94	Maṭla' al-Shams <sup>50)</sup>	Muḥammad Ḥasan Khān l'timād al-Salṭana	1300	Nāṣir al-Dīn Shāh のホラーサーン行の記録

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地・任命者等)
95	Waqāyi'-i 'Arz-i Rāh-i Tihṛān ba-Khurāsān	barādar-i Sām Mirzā	13c	マシュハドへの使者 (N)
96	Waqāyi'-i Yawmiya-yi Ittifāqiya	'Alī Zayn al-'Ābidīn	1302?	'Alī Naqī Khān のアハル行の記録
97	Yādbūdhā-yi Sifarat-i Iṣṭānbū <sup>1)</sup>	Khān Malik Sāsāni	14c	イスタンブールのイラン大使館の記録
98	Yāddāshthā-yi Rūzāna	Mirzā Aṣghar Khān Talagrāfchi	1311	ホッラムアーバードの電報局員の記録

- <sup>1)</sup> Offset of 1300q., *Rūznāma-yi Mir'āt al-Safar*, Tehran, 1363s., pp. 37-92.
- <sup>2)</sup> Mirzā Šāliḥ, Gh-Ḥ. (ed.), Tehran, 1379s.
- <sup>3)</sup> Āl-i Dā'ud, S. 'A. (ed.), *Dū Safarnāma az Junūb*, Tehran, 1368s., pp. 117-227.
- <sup>4)</sup> Lithography, Tabriz, 1316q.
- <sup>5)</sup> Afshār, I. (ed.), MII 7, 1377s., pp. 241-253.
- <sup>6)</sup> Mursilwand, Ḥ. (ed.), Tehran, 1364s. / Cloake, M. M. (tr.), London, 1988.
- <sup>7)</sup> Afshār, I. (ed.), Tehran, 1349s.
- <sup>8)</sup> Gulbun, M. (ed.), Tehran, 1357s.
- <sup>9)</sup> Mushiri, M. (ed.), Tehran, 1348s.
- <sup>10)</sup> Iṣfahāniyān, K. (ed.), FIZ 15, 1347s., pp. 327-358.
- <sup>11)</sup> Zabīḥi, M. (ed.), *Astarābād Nāma*, Tehran, 1356s., pp. 91-103.
- <sup>12)</sup> Kā'ūsī 'Arāqī, M. -Ḥ. & M. -N. Naṣiri Muqaddam (eds.), Tehran, 1373s.
- <sup>13)</sup> Maḥmūdī, M. (ed.), *Safarnāma-yi Mirzā Khānlar Khān*, Tehran, 1351s., pp. 73-310.
- <sup>14)</sup> Maḥmūdī, M. (ed.), *Safarnāma-yi Mirzā Khānlar Khān*, Tehran, 1351s., pp. 1-56.
- <sup>15)</sup> Rawshani Za'frānlū, Q. (ed.), *Sah Safarnāma*, Tehran, 1353s., pp. 1-71.
- <sup>16)</sup> Offset of 1292q., Tehran, 2536.
- <sup>17)</sup> Salūr, M. (ed.), *Safarnāma-yi 'Abd al-Šamad Mirzā 'Izz al-Dawla*, Tehran, 1374s., pp. 357-377.
- <sup>18)</sup> Salūr, M. (ed.), *Safarnāma-yi 'Abd al-Šamad Mirzā 'Izz al-Dawla*, Tehran, 1374s., pp. 379-401.
- <sup>19)</sup> Sīpāhiyān (Muḥaddīth), Sh. (ed.), GB 1, 1377s., pp. 145-209.
- <sup>20)</sup> Marāghī, M. Ṭ. (ed.), MII 5, 1376s., pp. 387-466.
- <sup>21)</sup> Afshār, I. & M. R. Daryāghasht (ed.), Tehran, 1374s.
- <sup>22)</sup> Waḥīd-niyā, S. (ed.), Tehran, 1364s.
- <sup>23)</sup> Afshār, I. (ed.), MII 9, 1377s., pp. 665-670.
- <sup>24)</sup> Kiyānfar, J. (ed.), GB 1, 1377s., pp. 99-122.
- <sup>25)</sup> Šamādī, Ḥ. (ed.), Gonbad-e Kavus, 1371s.
- <sup>26)</sup> Gulbun, M. (ed.), Tehran, 2536.
- <sup>27)</sup> Āl-i Dā'ud, S. 'A. (ed.), *Dū Safarnāma az Junūb*, Tehran, 1368s., pp. 19-116.
- <sup>28)</sup> Gulbun, M. (ed.), Tehran, 2536.
- <sup>29)</sup> Rawshani, Q. (ed.), MII 6, 1376s., pp. 499-571.
- <sup>30)</sup> Afshār, I. (ed.), FIZ 12, 1343s., pp. 122-144.
- <sup>31)</sup> Tabarrā'iyān, Š. (ed.), Tehran, 1370s.
- <sup>32)</sup> Dabir Siyāqī, M. (ed.), Tehran, 1341s.
- <sup>33)</sup> Gulbun, M. (ed.), *Safarnāma-yi Khusrāw Mirzā*, Tehran, 1349s., pp. 141-386.
- <sup>34)</sup> 1) Salūr, M. (ed.), *Safarnāma-yi 'Abd al-Šamad Mirzā 'Izz al-Dawla*, Tehran, 1374s., pp. 261-355. 2) Gulbun, M. (ed.), *Safarnāma-yi Irān wa Rūsiya*, Tehran, 1363s., pp. 23-76.
- <sup>35)</sup> 1) Gulbun, M. (ed.), MII 9, pp. 55-72. 2) Istakhri, P. (ed.), GB 1, 1377s., pp. 123-143. 両校訂者ともに、依拠した写本等について何ら述べていないため同定には注意を要するが、内容は両者とも同一である。Istakhri は、本書の執筆年を 1290 年としているが、著者が執筆に際し「Gük Tappa 征服 (1298 年) 後」と述べていることや、「yilān 'yil (巳年)」が 1290 年には合致しないこと、また同年には Rukn al-Dawla はホラーサーン長官ではなかったことから、この書の執筆は Gulbun 校訂の 1298 年がより相応しいと考えられる。
- <sup>36)</sup> Afshār, I. (ed.), *Safarnāma-yi 'Atabāt-i Nāšir al-Dīn Shāh Qājār*, Tehran, 1363s., pp. 217-234.
- <sup>37)</sup> Mursilwand, Ḥ. (ed.), Tehran, 1370s.
- <sup>38)</sup> Salūr, M. (ed.), *Safarnāma-yi 'Abd al-Šamad Mirzā 'Izz al-Dawla*, Tehran, 1374s., pp. 185-260.
- <sup>39)</sup> Mudarrisi Ṭabāṭabā'i, Ḥ. (ed.), FIZ 22, 1356s., pp. 67-150.
- <sup>40)</sup> Ḥāfiẓiyān Bābulī, A. (ed.), MII 5, 1376s., pp. 467-494.
- <sup>41)</sup> Ittiḥādīya (Niẓām Māfi), M. (ed.), Tehran, 1360s.
- <sup>42)</sup> Rawshani Za'frānlū, Q. (ed.), *Sah Safarnāma*, Tehran, 1353s., pp. 73-144.
- <sup>43)</sup> Fattāḥī, F. (ed.), *Safarnāma-yi Mirzā Fattāḥ Khān Garmrūdi*, Tehran, 1347s., pp. 992-1041.
- <sup>44)</sup> Shahrastāni, M. (ed.), Tehran, 1347s.
- <sup>45)</sup> Fattāḥī, F. (ed.), *Safarnāma-yi Mirzā Fattāḥ Khān Garmrūdi*, Tehran, 1347s., pp. 725-909.
- <sup>46)</sup> Afshār, I. (ed.), FIZ 22, 1356s., pp. 459-496.
- <sup>47)</sup> Gulbun, M. (ed.), MII 10, 1378s., pp. 223-264.
- <sup>48)</sup> Iṣfahāniyān, K. & Q. Rawshani (eds.), Tehran, 1361s.
- <sup>49)</sup> Offset of 1288q., *Rūznāma-yi Mir'āt al-Safar*, Tehran, 1363s., pp. 11-36.
- <sup>50)</sup> Offset of 1301q., 3vols. in 1 volume, Tehran, 2535.
- <sup>51)</sup> Sāsāni, Kh. M. (ed.), Tehran, 1361s.

## Ⅲ—巡礼旅行記

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地等)
1	Az Ḥarim tā Ḥaram <sup>1)</sup>	Abū al-Ḥasan Khān Fakhr al-Mulk Ardalān	1304	アタバート
2	Bazm-i Gharīb <sup>2)</sup>	Muḥammad 'Alī Khān Burūjirdī	1261-62	シーラーズ→メッカ・メディナ
3	Bazm-i Gharīb	Asad Allāh Khān Shirāzī	1221	メッカ・メディナ
4	Tuḥfat al-Ḥaramayn	Mīrzā Ma'sūm Khāwārī Tabrizī	13c	メッカ・メディナ
5	Tuḥfat al-Ḥaramayn wa Sa'adat al-Dārayn <sup>3)</sup>	Mīrzā Ma'sūm Nā'ib al-Ṣadr Shirāzī	1305	メッカ・メディナ
6	al-Tadqiq fi Sayr al-Ṭariq <sup>4)</sup>	Mīrzā Muḥammad 'Alī Khān Sadīd al-Saltāna	1308, 1314-16	ブーシェフル→マシュハド・アタバート
7	Tazkirat al-Ṭariq fi Mašā'ib Ḥujjāz Bayt al-'Atīq	Muḥammad 'Abd al-Ḥusayn Karbalā'i Hindī	1230-32	アタバート→メッカ・メディナ
8	Tir-i Ajal dar Ṣadamāt-i Rāh-i Jabal <sup>5)</sup>	?	1299?	メッカ・メディナ・アタバート
9	Jughrāfiyā-yi 'Irāq-i 'Ajam wa 'Arab	Muḥammad Mīrzā Muhandis	1302	アタバート
10	Jangal-i Mūlī <sup>6)</sup>	Āyat Allāh Aḥmad Zanjānī	1335	ザンジャン→ゴム
11	Ḥajj-nāma <sup>7)</sup>	Manṣūr 'Alī Shāh Qazwīnī	1248?	メッカ・メディナ
12	Khāṭirat-i Safar-i Ḥajj <sup>8)</sup>	Sulṭān Ḥusayn Gunābādī	14c	メッカ・メディナ
13	Dāstān-i Bār-yāftagān <sup>9)</sup>	Mīr Sayyid Aḥmad Hidāyati	1338	アタバート・メッカ・メディナ
14	Dāstān-i Raftan-i Naṣir al-Dīn Shāh ba-'Atabāt	Naṣir al-Islām Māzandarānī	1287?	Naṣir al-Dīn Shāh のアタバート行
15	Dalīl al-Anām fi Sabīl Ziyāra Bayt Allāh al-Ḥarām <sup>10)</sup>	Sulṭān Murād Ḥusām al-Saltāna	1297-98	メッカ・メディナ
16	Dalīl al-Zā'irīn <sup>11)</sup>	'Abd al-'Alī Khān Adīb al-Mulk	1273	アタバート
17	Rūznāma	?	1337-41	ハマダーン→アタバート
18	Rūznāma-yi Ḥakīm al-Mamālīk <sup>12)</sup>	Mīrzā 'Alī Naqī Ḥakīm al-Mamālīk	1283-84	Naṣir al-Dīn Shāh のマシュハド行
19	Rūznāma-yi Safar-i 'Atabāt-i 'Āliyāt <sup>13)</sup>	Mīrzā Khānlar Khān I'tiṣām al-Mulk	1285	アタバート
20	Rūznāma-yi Waqāyi'-i Safar-i Karbalā' <sup>14)</sup>	?	1272	アタバート
21	Safarnāma	'Alī I'timād Niẓām	1300-06	アタバート
22	Safarnāma	Ḥamza Qājār	1277	マシュハド
23	Safarnāma-yi Iṣfahān tā Mashhad	?	1317	エスファハーン→マシュハド・レイ
24	Safarnāma-yi Ḥijāz	Mīrzā Muḥammad Ḥusayn Shahrastānī	13-14c	メッカ・メディナ
25	Safarnāma-yi Ḥajj	?	1316-17	メッカ・メディナ
26	Safarnāma-yi Ḥajj al-Bayt <sup>15)</sup>	Mullā Ibrāhīm Kāzīrūnī	1315-16	シーラーズ→メッカ・メディナ
27	Safarnāma-yi Ḥajj-i Bayt Allāh al-Ḥaram	'Alī Akbar Mīrzā'i	?	メッカ・メディナ
28	Safarnāma-yi Raẓawī <sup>16)</sup>	Muḥammad Rafī' Niẓām al-'Ulamā Tabrizī	1301	マシュハド
29	Safarnāma-yi Khurāsān <sup>17)</sup>	Naṣir al-Dīn Shāh	1300	マシュハド
30	Safarnāma-yi Ziyārat-i Āstāna-yi Muqaddas	Muḥammad Ḥasan Munshī Asrār Tabrizī	1307	マシュハド
31	Safarnāma-yi 'Atabāt	Mīrzā Rizā Khān Tibyān al-Mulk	1329	アタバート
32	Safarnāma-yi 'Atabāt	Mīrzā Ḥusayn Khān Jāmī Muhājirānī	1321-22	ハマダーン→アタバート
33	Safarnāma-yi 'Atabāt	Sayyid Jalāl Shūshtarī	14c	アタバート

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地等)
34	Safarnāma-yi 'Atabāt	Mirzā Muḥammad 'Azīm Khān Qandahārī	14c	ヘラート→アタバート
35	Safarnāma-yi 'Atabāt	Muḥammad Mu'arrikh al-Dawla Gulistāna	1344-45	エスファハーン→アタバート
36	Safarnāma-yi 'Atabāt <sup>18)</sup>	Nāṣir al-Dīn Shāh	1287	アタバート
37	Safarnāma-yi 'Atabāt <sup>19)</sup>	Amīn al-Shar' Khū'i	1328	ホイ→アタバート
38	Safarnāma-yi 'Atabāt wa Makka <sup>20)</sup>	?	1317-18	アタバート・メッカ・メディナ
39	Safarnāma-yi Gharwī <sup>21)</sup>	Muḥammad Rafī' Nizām al-'Ulamā Tabrizī	1313	アタバート
40	Safarnāma-yi Qum	Ḥusayn Piyāda Nizām	1313	ゴム
41	Safarnāma-yi Qum <sup>22)</sup>	Nāṣir al-Dīn Shāh	1284	ゴム
42	Safarnāma-yi Qum	Nāṣir al-Dīn Shāh	1300	ゴム
43	Safarnāma-yi Qum <sup>23)</sup>	Ja'far Qulī Khān Mu'in al-Sulṭān	1300	ゴム
44	Safarnāma-yi Qum <sup>24)</sup>	Kāmrān Mirzā	1320	ゴム
45	Safarnāma-yi Karbalā	?	1299	アタバート
46	Safarnāma-yi Karbalā-yi Mu'allā <sup>25)</sup>	'Alī Khān Ṣafā al-Salṭana Nā'ini	1318	アタバート
47	Safarnāma-yi Mashhad	Sayyid Shafī' Khān Tifriṣhī	14c	マシュハド
48	Safarnāma-yi Mashhad	Asad Allāh Wakīl al-Mulk	?	マシュハド
49	Safarnāma-yi Mashhad	Mirzā Rizā Khān Tibyān al-Mulk	1315	マシュハド
50	Safarnāma-yi Makka <sup>26)</sup>	'Alī Khān I'timād al-Salṭana	1263	メッカ・メディナ
51	Safarnāma-yi Makka <sup>27)</sup>	Luṭf 'Alī Khān I'lā'i	1336	アブハル→アタバート・メッカ
52	Safarnāma-yi Makka <sup>28)</sup>	'Alī Khān Amīn al-Dawla	1316	ギーラーン→メッカ
53	Safarnāma-yi Makka	Muḥammad Qayrī	1247	シーラーズ→メッカ
54	Safarnāma-yi Makka	Muḥammad Rizā Ṭabāṭabā'i Tabrizī	1296-97	タブリーズ→メッカ・メディナ
55	Safarnāma-yi Makka	'Alī Ṣadr al-Zākīrīn Tīhrānī	1325	メッカ
56	Safarnāma-yi Makka <sup>29)</sup>	bint Farhād Mirzā	1297-98	アタバート・メッカ・メディナ
57	Safarnāma-yi Makka <sup>30)</sup>	Muḥammad Ḥusayn Farāhānī	1302-03	メッカ・メディナ
58	Safarnāma-yi Makka	Muḥammad 'Alī Farāhānī	1263-64	タブリーズ→メッカ
59	Safarnāma-yi Makka <sup>31)</sup>	Sayf al-Dawla Sulṭān Muḥammad	1279	メッカ・メディナ・アタバート
60	Safarnāma-yi Makka <sup>32)</sup>	Muḥammad Walī Mirzā Qājār	1261	アタバート・メッカ・メディナ
61	Safarnāma-yi Makka	Mudīr al-Dawla	1321-22	メッカ
62	Safarnāma-yi Makka <sup>33)</sup>	Ibrāhīm Mushṭarī Khurāsānī	1300	アタバート・メッカ
63	Safarnāma-yi Makka <sup>34)</sup>	Mirzā Dā'ud Wazīr-i Wazā'if	1324	マシュハド→メッカ・アタバート
64	Safarnāma-yi Makka <sup>35)</sup>	Mahdī Qulī Khān Hidāyat	1321-22	メッカ・メディナ
65	Safarnāma-yi Makka	Muḥammad Ḥusayn Hamadānī	1307	メッカ
66	Safarnāma-yi Makka <sup>36)</sup>	Mirzā 'Alī Iṣfahānī	1331	ナジャフ→メッカ
67	Safarnāma-yi Makka <sup>37)</sup>	?	1288	ナジャフ→メッカ
68	Safarnāma-yi Makka <sup>38)</sup>	'Abd al-Ghaffār Najm al-Mulk	1306?	アタバート・メッカ・メディナ
69	Safarnāma-yi Makka	?	1316-17	メッカ・メディナ
70	Safarnāma-yi Makka	?	1319	マシュハド→メッカ
71	Safarnāma-yi Makka	?	1309-10	メッカ・メディナ・アタバート

No.	書名	著者名	執筆年	備考(目的地等)
72	Safarnāma-yi Makka <sup>39)</sup>	Muḥammad Rizā Ṣāhīr al-Mulk	1306-07	アタバート・メッカ・メディナ
73	Safarnāma-yi Makka	'Alī Khān Ḥājib al-Dawla	13c	メッカ
74	Safarnāma-yi Makka	'Abd al-Ḥusayn Khān Afshār	1299	メッカ
75	Safarnāma-yi Munshi-zāda <sup>40)</sup>	Muḥammad Ḥusayn Munshi-zāda	1338-51	ヤズド→マシュハド・メッカ・アタバート・ゴム
76	Safarnāma-yi Manẓūm	Mīrzā Jalāyir	13c	メッカ・カーズイマイン
77	'Urāzat al-Ikhwān dar Safarnāma-yi Khurāsān <sup>41)</sup>	Muḥammad 'Alī Mu'allim Ḥabībābādī	1338	エスファハーン→マシュハド
78	'Alīābād-nāma <sup>42)</sup>	'Alī Aṣghar Khān Amin al-Sulṭān	1304	ゴム
79	Mishkāt al-Musāfirīn <sup>43)</sup>	Humā' 'Alī Akbar Mishkāt al-Sulṭān	1317	タブリーズ→アタバート
80	al-Wajiza fi Ta'rīf Madīna <sup>44)</sup>	Muḥammad Mīrzā Muhandis	1294	ヤンブウ→メディナ
81	Hidāyat al-Sābil wa Kifāyat al-Dalīl <sup>45)</sup>	Farḥād Mīrzā Mu'tamad al-Dawla	1292-93	メッカ・メディナ

- 1) 'Abbāsī, M. -R. (ed.), Tehran, 1372s.  
2) Mi'rājī, M. M. (ed.), MII 6, 1376s., pp. 739-803.  
3) Offset of 1306q, Tehran, 1362s.  
4) Iqtidārī, A. (ed.), Tehran, 1362s.  
5) Ja'fariyān, R. (ed.), FMH 35, 1380s., pp. 84-118.  
6) Shubayrī, S. J. (ed.), MII 9, 1377s., pp. 565-654.  
7) Lithography, Tehran, 1248q.  
8) Jaẓābī, S. Ḥ. (ed.), Tehran, 1337s.  
9) Qāzī 'Askar, S. 'A. (ed.), Tehran, 1378s.  
10) Ja'fariyān, R. (ed.), Qom, 1374s.  
11) Gulzārī, M. (ed.), Tehran, 1364s.  
12) Offset of 1286q, Tehran, 1356s.  
13) Maḥmūdī, M. (ed.), *Safarnāma-yi Mīrzā Khānlar Khān*, Tehran, 1351s., pp. 57-71.  
14) Mukhtārī Rizwānshahri, Sh. 'A. (ed.), MII 1, 1373s., pp. 17-75.  
15) Ja'fariyān, R. (ed.), MII 5, 1376s., pp. 321-385.  
16) Lithography, Tabriz, 1324q.  
17) Offset of 1306q, Tehran, 1361s.  
18) Afshār, I. (ed.), Tehran, 1363s.  
19) Ṣadrā'i Khū'i, 'A. (ed.), MII 7, 1377s., pp. 489-530.  
20) Ja'fariyān, R. & Ṣ. Barzgar (eds.), MII 5, 1376s., pp. 119-228.  
21) Lithography, Tabriz, 1313q.  
22) Qāzīhā, F. (ed.), GA 37-38, 1379s., pp. 23-33.  
23) Muttaqī, Ḥ. (ed.), MII 9, 1377s., pp. 291-298.  
24) Afshār, I. (ed.), MII 9, 1377s., pp. 655-664.  
25) Barzgar, Ṣ. (ed.), MII 7, 1377s., pp. 751-768.  
26) Qāzī 'Askar, S. 'A. (ed.), Tehran, 1379s.  
27) Qāzī 'Askar, S. 'A. (ed.), part 2, FMH 33, 1379s., pp. 136-159, part 3, ibid 35, 1380s., pp. 180-205.  
28) Kāzīmīya, I. (ed.), Tehran, 1354s.  
29) Ja'fariyān, R. (ed.), MII 5, 1376s., pp. 263-320.  
30) 1) Farmān-farmā'iyān, Ḥ. (ed.), Tehran, 1342s. 2) Gulzārī, M. (ed.), Tehran, 1362s. /Farmayan, H. & E. L. Daniel (trs.), Austin, 1990.  
31) Khudā-parast, 'A. A. (ed.), Tehran, 1364s.  
32) Ja'fariyān, R. (ed.), *Ba-Sūy-i Umm al-Qurā*, Tehran, 1373s., pp. 229-281.  
33) Lithography, Tehran, 1300q.  
34) Qāzī 'Askar, S. 'A. (ed.), Tehran, 1379s.  
35) Dabīr Siyāqī, M. (ed.), Tehran, 1368s.  
36) Ja'fariyān, R. (ed.), *Ba-Sūy-i Umm al-Qurā*, Tehran, 1373s., pp. 151-227.  
37) Qāzī 'Askar, S. 'A. (ed.), partly, FMH 28, 1378s., pp. 178-192.  
38) Qāzī 'Askar, S. 'A. (ed.), FMH 19, 1376s., pp. 165-187.  
39) Ja'fariyān, R. (ed.), MII 5, 1376s., pp. 229-261.  
40) Munshi-zāda, M. -B. (ed.), Yazd, 1371s.  
41) Barzgar, S. (ed.), MII 10, 1378s., pp. 521-564.  
42) Mudarrisī Ṭabāṭabā'i, Ḥ. (ed.), FIZ 22, 1356s., pp. 207-280.  
43) Muḥaddith, M. H. (ed.), MII 5, 1376s., pp. 11-118.  
44) Ja'fariyān, R. (ed.), *Ba-Sūy-i Umm al-Qurā*, Tehran, 1373s., pp. 283-327.  
45) 1) Ṭabāṭabā'i, Gh. (ed.), Tehran, 1366s. 2) Ṣafā, I. N. (ed.), Tehran, 1346s.

凡 例

- \* 表の作成にあたっては、主に Munzawī 1374s の「safarnāma」の章に基づいているが、この他にも、誤りが明らかな場合や欠落しているものについては、*Fihrist-i Nusakh-i Khaṭṭi-yi Kitābkhāna-yi Milli* (10 vols., Tehran, 1343-58s), *Fihrist-i Kitābhā-yi Khaṭṭi-yi Kitābkhāna-yi Milli-yi Malik wābasta ba-Āstān-i Quds* (vol. 2-3, Tehran, 1354-61s), *Persian Literature* (vol. 1-2, London, 1972) などの写本目録, *Fihrist-i Kitābhā-yi Chāpi-yi Fārsī* (Tehran, 1350-55s), *Kitābshināsi-yi Tārikh-i Īrān* (Tehran, 1375s), *Fihrist-i Mawzū'i-yi Safarnāmahā-yi marbūṭ ba-Īrān* (Tabriz, 1367s) などのカタログ、および公刊されたものについては諸刊本を参照し、適宜修正を施している。重複している場合には、適当と思われる書名を採用した。
- \* 執筆年はヒジュラ暦。執筆年の不明な場合は旅行の年を挙げている。
- \* 旅行の出発地はテヘラン以外の場合のみ記し、テヘランを起点とする場合には省略した。
- \* 官命旅行記の ( ) 内は任命者を示し、略号は、FA=Fath 'Alī Shāh, Mh=Mūḥammad Shāh, N=Nāṣir al-Dīn Shāh をそれぞれ表す。
- \* 出版されているものについては注をつけ、校訂者名と出版地及び出版年のみを記す。イタリックは所収の書名。
- \* 本文中での [ ] 内の数字は、この3つの表に対応する。

参 考 文 献

FIZ: *Farhang-i Īrān Zamīn*.

FMH: *Faṣl-nāma-yi Miqāt-i Ḥajj*.

GA: *Ganjīna-yi Asnād*.

GB: *Ganjīna-yi Bahāristān (Majmū'a-yi Rasā'il-i Maktūb)*.

IN: *Īrān-nāma*.

MA: I'timād al-Salṭana, *al-Ma'āthir wa al-Āthār*. Tehran, 1307 q.

MII: *Mirāth-i Islāmī-yi Īrān*.

Kirmānī: *Zu'l-Faqār Kirmānī, Jughrāfiyā-yi Nimrūz*. 'Uṭāridī, 'A. (ed.), Tehran, 1374s.

Āriyā, M. Ḥ. (1376s) *Luristān dar Safarnāma-yi Sayyāhān*. Tehran.

Ashraf, A. (1375s-a) *Kitābshināsi-yi Khāṭirāt-i Īrānī*. IN 14 (4), 639-668.

Ashraf, A. (1375s-b) *Tārikh, Khāṭira, Afsāna*. IN 14 (4), 525-538.

Fragner, B. G. (1979) *Persische Memoirenliteratur als Quelle zur Neueren Geschichte Irans*. Wiesbaden.

Jawādī, Ḥ. (1378s) *Īrān az Dīda-yi Sayyāhān-i Urūpā'i az Qadīmtarin Ayyām tā Awāyil-i 'Ahd-i Ṣafawīya*. Tehran.

Jawān-bakht, M. (1379s) *Īrānī az Nigāh-i Anīrānī, Khulq wa Khū-yi Īrānīyān az Nigāh-i Sayyā-*



- hān. Esfahan.
- Inṣāfpūr, Gh-R. (1363s) *Īrān wa Īrānī, ba-Taḥqīq dar Ṣad Safarnāma-yi Khārijī marbūṭ ba-Dawrān-i Qājāriya*. Tehran.
- Ishrāqī, F. (1378s) *Iṣfahān az Did-i Sayyāhān-i Khārijī*. Esfahan.
- Ja'fariyān, R. (1379s) Ḥajj-guzārī-yi Īrāniyān dar Dawra-yi Qājār (1210 – 1344 qamarī). *Maqālāt-i Tārikhi*. vol. 8. 171 – 270.
- Munzawī, A. (1374s) *Fihristwāra-yi Kitābhā-yi Fārsī*. vol. 1. Tehran.
- Qarib, Sh. 'A. (1377s) Zh. Qarib (tr.), *Rūzana'i ba-Tārikh-i Īrān dar Sadahā-yi Guzashta*. Tehran.
- Ṭabāṭabā'i, J. (1377s) Ta'ammulī dar Sifārat wa Safarnāmahā-yi Īrāniyān. IN 17 (1), 55 – 88.
- Ṭāhir-niyā, B. (1376s) *Mashhad az Nigāh-i Sayyāhān az 1600 tā 1914 milādī, bā Ta'kid bar Manābi'-i Tarjuma shuda ba-Fārsī*. Mashhad.
- Ṭāhiri, A. (1348s) *Jughrāfiyā-yi Tārikhi-yi Khurāsān az Naẓar-i Jahāngardān*. Tehran.
- Wickens, G. M. (1983) Shah Muzaffar Al-Din's European tour, AD 1900. *Qajar Iran, Political, Social and Cultural Change 1800–1925*. 34 – 47.
- 小牧昌平 (1991) カルバラーへの道 鶴見良行・村井吉敬(編)『道のアジア史——モノ・ヒト・文化の交流』同文館, 197 – 215.
- 坂本 勉 (1986) 近代イスラーム巡礼資料覚書——シーア派を中心として『オリエント』29 (1), 113 – 128.
- 坂本 勉 (1992) イラン人のメッカ巡礼と都市ネットワーク『東洋文化』72, 191 – 234.
- 坂本 勉 (2000) 『イスラーム巡礼』岩波書店.
- シャルダン, J. (1997) 『ペルシア見聞記』, 岡田直次訳注, 平凡社.
- タージ・アッサルトネ (1998) 『ペルシア王宮物語——ハレムに育った王女』, 田隅恒生訳, 平凡社.

(京都大学大学院文学研究科)